小唄との縁

株式会社 証券保管振替機構
代表取締役社長　**加藤　治彦**

三重県庁に出向を命じられ、県庁所在地の津市に赴任したのは平成４年の夏のことである。あれから早くも20年以上の歳月が流れたが、「小唄との縁」はそこから始まった。

当時津では宴席に三味線が入ることはめずらしいことではなく、芸者さんだけでなく、参加者が自慢ののどを披露することもよくあった。津に赴任する以前、東京の宴席で先輩が小唄を唄い、それに合わせて芸者さんが踊るのを見てカッコイイなと思った経験があり、いささかのあこがれもあったことから、小唄が身近な当地で本格的に習うことにした。よく同席する芸者さんが小唄の師匠をしており、入門しやすかったことも幸いした。東京に戻ったら同僚・先輩を驚かせようというやや不純な動機もあったが、稽古を重ねるうちに小唄の魅力に取り付かれ、東京に帰るまで熱心に師匠の下に通った。

３年の出向期間を終えて東京へ戻ったところ、綱紀粛正一色の状況で、小唄を披露するような宴席は皆無となっていたが、小唄自体が好きになった私は東京へ戻った直後から、紹介された新しい師匠の下で稽古を続けた。さすがに本省勤務と稽古の両立は難しく、２年弱で挫折したが、それでも通算で５年近く師匠に付いて学んだことになる。その後は師匠に付くことなく、たまに三越劇場などで行われる小唄の会を鑑賞したりする程度で、「小唄との縁」は長きに亘って細々とした状態が続いた。

転機が訪れたのは35年余に及ぶに公務員生活に終止符を打った後のことである。敬愛する先輩に勧められて東京日本橋ロータリー・クラブに入会したことが契機となった。地元の老舗企業の関係者も多い当クラブには小唄同好会があり、早速入会させていただいた。さらに同会の先輩から新しい師匠を紹介していただき、久し振りに稽古を再開することも出来た。加えて今般は小唄の世界に止まらず新たな展開が生まれたのである。それは小唄同好会の別の先輩の紹介により、伝統文化に親しむ有志の会に入会させていただいたことである。この会には小唄のみならず様々な邦楽の愛好者が参加されており、私の交際範囲も大きく広がることになった。

私は「結縁、尊縁、従縁」という言葉が好きで、これまで「縁」のありがたさを何度も感じてきたが、今回は小唄のお陰で新しい「縁」が結ばれることになったのである。改めて「小唄との縁」に感謝する今日此頃である。